

---

# 不良

夢野ユーマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不良

### 【Nコード】

N67090

### 【作者名】

夢野ユーマ

### 【あらすじ】

名門私立高の落ちこぼれ生徒と、予備校のアラサー頑固者先生。二人の不思議な絆。

## 出会い

飲み干したコーヒーカップをカチャンとソーサーに置いた。名古屋の千種。高級コーヒーショップ、ボワドヴァンサンヌ。一杯は525円。二杯めは260円。いつも二杯飲む。マイルドなブレンドとストロングなブレンド。一杯ずつ。小さいグラスのお水を飲む。そうすると店員さんがおかわりを持ってきてくれる。ファストフードの店と違い、本当に一流の豆を使っているの、私はミルクを使わないし、ケーキやサンドイッチも頼まない。スプーン二杯の砂糖だけで飲む。アロマを楽しむ。

私がカップをソーサーに置いた時、後ろの席の高校生が紙幣を数え終えて、封筒に入れた。「よし、ちゃんとあるな」私はその高校生の手首をつかんだ。金髪でパーマをかけている。意外とあどけない顔をしている。

「な、何するんですか？」

「速水くん、恐喝の現行犯ですよ」

速水は封筒を私の生徒、佳彦の胸に投げつけた。

「せめて学校のセンコーに言えよ！！予備校のセンコーに言うなよ！！」

佳彦は封筒を慌てて学生カバンにしまった。私は速水の手首をはなさなかった。

「佳彦にも過失があるかも知れないけど、君もいいとこのボンボンでしょ。こんなトラブルで終わりたいくないでしょ。手を引きなさい」  
「分かったよ！どうすりゃいいんだよ！」

「佳彦が不法にダウンロードしたデータはここで全て消去する。そ

の代わり、君も何も要求しない。それでどうですか？」

「はいはい、分かりました。分かったんで、手をはなして下さい！」

私は速水の手首を解放した。

話は昨日にさかのぼる。

私は名古屋の千種から今池にかけての予備校林立（乱立？）地帯のある予備校で働いている。

講師控え室に聖イグナチウス学院の一年生の野上佳彦が入ってきた。中一から、ずっとめんどろをみている子だ。

佳彦は涙ぐんでいた。

「先生、助けて下さい・・・」

「何？」

「不良にゆすられているんです」

私は国語・小論文（時に応じて英語も）を教えている。しかし、話ののみこみは早くない。

「今池でカツアゲにあったんですか？」

千種は学生街だが、今池はパチンコ屋など多く、多少、荒っぽいところである。

「いいえ、あのダウンロードって分かります？」

「分かりません」

私はにべもなく答えた。私はパソコン、iPod、アイパッド、コンピュータゲーム機、どれも持っていない。（ケータイは辛うじて

持っている。」

「あの・・・うちの学校の不良で・・・コンピュータの改造が上手い奴がいてえ、インターネット上でいろんなソフトを買って、データを手に入れるのをダウンロードって言んです。それを料金を払わず、落とせるように改造する奴がいるんですよ」

「それは犯罪なんですか」

「・・・僕もよく分からないんですけど、魔がさして、ゲームとか着うたとか落としてもらったんです。そしたら、お金ふっかけられて・・・学校の先生に相談したら、内申に傷がつくと思うし」

コツコツ。

私はキャップをしたボールペンでデスクを二回叩いた。

「黙りなさい。私も考え中です」という意味である。

ダウンロード・・・よくわかんない。しかし、あれか、映画を観ると最近はずっと違法な盗撮がインターネット上にあるとか警告が流れて・・・あの類だろう。

しかし、佳彦もお殿様だから脇が甘くて、困る。

「しかし、聖イグナチウスの不良なんてたいしたやつじゃないでしょう。金山とか行ったら、瞬殺でしょう」

佳彦が声をあげて笑った。体は小柄で、おっとりした子である。

「笑っている場合じゃありません。どうしたらいいんです？」

「あの・・・データは消すから、お金は払えないって伝えて欲しいんです」

私は非常に迷惑そうな顔はしつとも受け入れた。

「じゃあ、明日、正文館書店一階のボウドヴァンサンヌにその子を呼び出さない。私が現場をおさえます」

佳彦はホッとした顔をしていた。

ちなみに書き添えておく。私は33歳。独身。十年以上前の大学でのコンピュータの授業の成績はギリギリ合格だった。

そして、ボウドヴァンサンヌに話は戻ってくる。私は速水と向きあっていた。

「煙草吸ってもいいですか？」

「かまいませんよ」

私は速水を観察した。コーヒーは頼まず、三つのケーキがお皿に載っている。

「コーヒーだめなの？」

「はい、大人ちつくな飲み物は酒だけです。飲むのは」

「君もけっこういいとこの子でしょう。こんなことしてどうするんです？望めばいくらでもおこづかいもらえるでしょ」

その問いかけには速水は顔をそむけた。妙に子供っぽいところと大人のところが混在している。

速水はいいことを思いついた顔を見るとカバンを開けた。

「見て下さい。これ、手作りの警棒です。パイプ椅子のパイプに石や砂を積めたんです」

パイプにはガムテープが巻いてあった。私は呆れて、ため息をついた。

「あと、これ、一番大事な宝物の写真です。知り合いの人にもらった特攻服を着ている写真」

私は急にふわつと速水の世界に引き込まれた。突然に彼の悲しみと私の悲しみが同調したのだ。

この子は傍目には申し分ない境遇に見えるかも知れないが、何か周りにうちとけられないものを持っていて、孤独を感じているのだろう。

そして、私もまた表面上社会に溶け込んでいるように見えて、どこか生きること居心地の悪さを感じているのだった。

「先生、浅倉悠哉先生ですよ」

「はい、そうですよ」

私の予備校には聖イグナチウスの生徒がたくさん来ているので、否定はしなかった。しらをきっても仕方がない。

「俺、先生のクラスに入りたいんですけど。佳彦のノート見せてもらってるんだけど、あいつまとめるの下手くそで」

私は苦笑した。

「それは正しいかもしれませんが」

速水の次の言い種も面白かった。

「先生のカバンの中を見せてくれませんか」

人によっては拒絶するのだが、私は速水にはカバン（典型的な文学部のカバン）の中身を見せてあげた。ノート。ルーズリーフ。原稿用紙。筆記具。

本。呉智英の「現代人の論語」、講談社学術文庫の「全現代語訳大鏡」、穂村弘の歌集三冊。英文法の参考書。などなど。

「クラス受講は事務所に申し込んで下さい」

「へいへい」

速水はケーキをたいらげ、私はコーヒーを飲み、外に出た。

「これ、いいでしょ。ちょっとミスターだけど」

「いいですね」

速水はフェラーリのステッカーを貼ったバイクに乗って、去って行った。

私はハッとして大声で叫んだ。

「はやみー、中島みゆきの『狼になりたい』って曲、知ってる？」

走り去る速水にはとても聞こえないようで、私、何だかさみしかった。



## グレートマザー

「美しいですよ。実に数学は美しいですよ。細部まで完璧で・・・」  
私は堀江教授と東大・京大クラスの生徒数人と、教室のあるビルの喫茶室で過ごしていた。休憩時間だった。

「浅倉くんなんかはひどい生徒ですよ。ゴールドバッハの予想なんかも分かっているんだから」

私は苦笑した。

私は受験生の時、堀江教授の著書を読んだ。私立大で数学の教授をやりながら、予備校の先生もやっていた堀江教授。参考書というより、教養にあふれた本。「数の美」

堀江教授は白髪をボウボウに伸ばして、ひげなんかも剃っていない時もある。すでに教授は退官なさっているが、少しも虚飾はなく、ジーンズにシンプルなポロシャツなど身軽でいらした。

山陰地方のご出身で、生徒が聞き取りやすいようNHKのアナウンサーのようにハキハキと大声で標準語でしゃべる。私は吹き出すのをこらえるのに骨が折れた。

私は「数の美」を読んだので、三十三歳の教務主任代行になっても「浅倉くん」であり、「生徒」であり、「F・落第生」である。

「私は光源氏とか在原業平とか世之介とか、そちらの方面ばかり追求しておりまして、ゴールドバッハのような高尚な方面は・・・」

私は堀江教授に素晴らしいパスを出した。

堀江教授は大喜びして言った。

「ジュリアン・ソレルスや、ブランシュ・デュボワのことばかり考えていると、こういう人間が製造されます。いいですか。ゴールドバッハの予想とは偶数は二つの素数の和であることを証明できない。いいですか！証明できないということですよ！」

私は一番優秀な鹿野という生徒に微笑みかけた。

「浅倉くん、百を構成している素数を二つ挙げて下さい」

「えっ・・・21と79」

ドツと生徒が笑った。「21は素数じゃない！」と声上がる。私は焦って、「23と77」と言い、笑い声が大きくなった。鹿野が助け舟を出した。

「3と97」

「いいですね」

「41と59」

「それもいい」

私は鹿野にもパスを出した。

「どうして証明出来ないって分かるの？」

「多分・・・素数は大きくなるほど素数であるか証明しにくくなるから」

堀江教授が拍手のジェスチャーをした。鹿野は大学過去問の本（いわゆる赤本）や予備校の模試のプリントを作っても国語の隣のスペースに数学があるとすぐ解いてしまう天才児だった。

一段落すると堀江教授は私という落第生に憐れみでパスを出してき  
た。

（そうやって私は堀江教授に学恩を無尽蔵に負っていくらしい。）

「しかし、詩歌というのは俗悪な近代小説と違って美しいものです」

私は堀江教授好みの歌をいくつか口ずさんだ。

「四極山（せきごくさん）ならの下葉を折り敷きて今宵はさ寝む都恋しき」（九州の四極山、都を遠く離れてならの木の枝や葉をしきつめて眠ろう。都が恋しいので、せめて夢で都を見るのだ）

「しぐれの雨まなくし降れば真木の葉もあらそひかねて色づきにけり」（時雨が絶え間なく降り注ぐと真木の葉も抗うことは出来なくて紅葉してしまった。それと同じでお前さんがひっきりなしに口説

くから娘さんも断りきれなくて、頬を赤く染めているよ)

「秋風の吹きにし日より音羽山みねの梢も色づきにけり」(秋風が吹いた日から音羽山の峰の梢も紅葉したよ。そして秋の恋は実ってお前も顔を赤らめている)

堀江教授は私に遅れて、そつと歌を口ずさんだ。

「詩歌とか恋愛も、なかなか美しくありませんか」

「そりゃあ、美しいです。恋はいい。どんなに醜い女でも一番美しい数の公式より美しい」

堀江教授の決め台詞に生徒がドツと笑った。

アカデミズム漫才が終わって、堀江教授は生徒たちと教室に向かい、私はロビーに向かった。

須賀さんという営業部長が「ああ浅倉先生」とソファから立ち上がり、軽く礼した。私は深々と礼する。どこかの私大の体育会出身の中年のオヤジだが、須賀さんはなかなかやり手だった。本当の本当の本当の腹は分からないが、講師に礼を尽くす。うちの予備校で

は教材などせこいものは売らない。売るのは良質な講義である。須賀さんはそういう信念を持っているように見える。

私は文学のこと以外はパーチクリンであり、須賀さんには上手くマネジメントされているのだが、須賀さんは巧妙に私の自尊心を傷つけない。

「あつ、おみえですよ」

流石の私も度肝を抜かれた。速水もベイビーフェイスのハンサムだったが、速水ママはすごくキレイだった。岩下志麻の若い時のようだった。私は「源氏」の研究者なんだから、服飾のことなんかも分かっているといけないんだけど、着物の種類は分からなかった。とにかく何百万もする着物に錦の帯で、要所要所は宝石で飾っていた。速水秀助はエムポリオアルマーニの服で、指環をトップにしたネックレスなどしていた。私はそんなにブランドに詳しくないが、後発の金持ちの持っている品でなく、代々継承している由緒ある品のようなだった。

私たちは速水の入学に際しての簡単な挨拶と打ち合わせをするのだった。

もつとも速水は自分でカリキュラムなど把握していたし、逆に速水ママは挨拶に来ただけで何も分かっていないようだった。

「あの、浅倉先生のコースってキャンセル待ちも出るんですよ。入れて下さってうれしいわ」

「秀助くんに簡単な成績の資料を見せてもらいましたので、ついて来られると判断いたしました」

秀助くんか・・・変な感じ・・・

「あの、先生は勉強が苦手な子にも非常に熱心にめんどろを見てくれますが、遅刻や無断欠席には厳しいので、マナー、エチケットは気をつけて」

速水ママは神妙にうなずいて、速水は笑いをこらえるのに骨が折れるようだった。

「浅倉先生の講座が軌道にのったら、英語・数学・理科なんかおすすめします」

速水ママは喜んで、うなずいていた。グレた息子が勉強すると言い出し、喜んでいるのだろう。

須賀さんは「入学キャンペーン品です」と速水に小さい包みを渡した。一万円の図書カードだ。

速水はママに連れられて帰っていった。

私は須賀さんと事務所に寄った。受付の女の子がコーヒーを出してくれる。給湯室でインスタントコーヒーと、クリームパウダーと砂糖をまぜて作るコーヒー。それはそれで、また一興。

「すごいお母さんでしたねー。若いし、キレイだし」

私は笑顔だけ返した。医療法人アクアの次期理事長夫人。病院や老人保健施設をいくつも仕切っている。そういう貫禄があった。ゴツドマザーだ。

と、須賀さんが私に一万円の図書カードをつきつけてきた。私はもちろん、おしかえした。

「今回、先生のスカウトですから営業奨励金」

「そんなのいいですよ！！私たちの間で水くさい。それに今後、こういうこともないと思うので、かえって負担になるし」

「いやいや、先生、よく働いて下さるから」

結局、私はカードを受けとった。本自体はよく買う。

しかし、最近はインターネットでの注文が多い。でも急に書店で買う時もあるし。それより、一万円分で私はささやかな宴をすることにした。

## 夜のストレンジャーズ

何人かの先生にメールをしておいてから、古文と漢文を講義した。古文は「長谷雄草子」「松陰日記」。漢文は韓退之の漢詩。「白氏新樂府」。「唐宋八大家読本」など。

もともと私の講義は脱線や小話が味とされている。

生徒たちを帰らせてから、ケータイの電源を入れる。

教務主任の松浦先生。出席。

堀江教授。出席。

英語の小山田先生。出席。

化学の近藤先生。出席。（この子はまだ大学生で、生徒のいない舞台裏ではヒロ君と言っているけど）

私が一万円分出すので、喜んで出席してくれる。

私が控え室を片付けると四人の先生はロビーで合流していた。その日は金曜日だった。

「あの金髪の子、浅倉くんが受け持つの？」

「そうなっちゃったんですよ」



「聖イグナチウスの有名人らしいっすね」

私たちはちよつと歩いて、近くの居酒屋に入った。私が予約しておいた。海鮮のお鍋。焼き鳥。和風のサラダ。料理はとりあえず、それぐらい頼んでおいた。

私とヒロ君は年長の先生のグラスや杯にビールや日本酒をついだ。そして、私がヒロ君のグラスにビールをついで、最後にヒロ君が私のグラスにビールを注いでくれる。

「速水に乾杯！」

いい加減な音頭で飲み会を始めた。

私はお酒はあんまりいけない方で、ビールを一杯飲むと、つくねやネギマを食べ出した。ヒロ君は手酌で飲み出した。

「ヒロ君、ピッチ早いね。明日、部活ないの？」

「ないから飲むすよ」

ヒロ君はしがさく、近江商人と小山田先生に言われていた。滋賀県から名古屋工業大学に来ていた。専攻は化学。アメフトをやっている。（もつとも私はアメフトとラグビーの違いも分からない。）背はそんなに高くないが、筋肉質で、お洒落。赤いメッシュを入れていた。ちよつとケチなところが欠点。今日も私にゴロニャーンとして、一銭も払わないつもりだろう。

小山田先生はたいへんな毒舌家で、知的なペシミストだった。日本嫌い、人間嫌いだった。

「今時、あんな髪染めたり、バイク乗ったり、浅倉さんと双璧の絶滅危惧種ですよ。はんかくさい。昭和で顔も頭の中も止まっているんですよ」

松浦先生とヒロくんが笑い転げる。ぶははっ。私は鶏肉を串からかみちぎった。

「特攻服の写真、見せてもらいました」  
全員が大爆笑する。松浦先生が言う。

「浅倉くんや速水くんのような人はどんな時代にも、どんな所にも一定程度います」

私は口をとがらせた。

「でも、そういう人間が『オデュッセイア』とか、『神曲』とか、『ユリシイズ』とかを生み出してきたのかも知れないですよ」  
「まあ、そうかもしれません」

松浦先生が海鮮鍋にはしをのばしたので、私も取り皿とはしを手にとる。堀江教授も。

白身魚と海老とホタテと野菜とマロニーちゃんをとった。話が段々、仕事と離れていく。

小山田先生。

「先日、持病の薬をもらいに病院に行ったら、自称立教出身というジジイが、肋間神経痛のことを六感だと思っているんですよ。私はこういう馬鹿な人間が大嫌いです。こういう人間は自分が社会の歯車の一つであることにも気づかず、自分を世の中の中心と思っている廃人に等しいおめでたい奴です」

少し酔ってきたのか、私は大声で笑った。ヒロくと堀江教授は一口野球の話をしていた。松浦先生は私小説を最近書いているとおっしゃった。

その始まりを少しうかがったが、私が書き散らしている売文と違って、オールドマスターズのように重厚で、知的かつ詩的だった。私はきまり悪くて、「お鍋にうどんかご飯入れます？」と尋ねた。

多数決でご飯をお鍋に入れることになり、（私とヒロくんが負けた。）食事を締めた。

とりあえず、私が払って領収書もらっておいた。

「帰れます？」ヒロ君が私のコートの裾をつかんで、訊いてきた。

「終電が近くなると、指定席の特急があるから大丈夫」

私は千種から金山まで中央線に乗り、金山で特急に乗って、大垣まで帰った。

大垣駅の南口から、大垣共立銀行の本社ビルの辺りまで、大垣の商店街がある。駅にごく近く、商店街の裏通りのはじまりの辺りに祖父母が建てた古びたマンションがある。他人様にかして、金もうけ出来るほどじゃない小ぢんまりとしたマンション。そこに私は住んでいた。郵便受けの郵便物を持って自分のフロアまで階段を昇る。

私はテレビを見ないので、和風の寝間に入る。NHKのラジオをかける。フランク・シナトラの「夜のストレンジャーズ」が流れる。

少し酔っているので布団に寝転ぶ。オイルヒーターのスイッチを入れて。

郵便物を見る。家電量販店のダイレクトメール。不要。車のディーラーのダイレクトメール。不要。日本文学会会長（大学時代の指導教官）の手紙。目を通す。「季刊『中世日本文学研究会会報』『大正文学勉強会レポート』が休刊となりました。厳しい状況です。学会の機関誌『日本文学と研究』をお勤めの教育機関などで定期購読して下さい」印刷された手紙。と、一枚のホテルの便せんが同封されていた。手書き。殴り書き。

「この前、観世能楽堂で早稲田の能楽研究の教授と大喧嘩した。早稲田の教授が会長選挙に出るかも知れない。順逆をあやまらぬように」

順逆をあやまる。天皇や将軍に謀反すること。会長は自己を天皇や将軍と同列に匹敵させているらしい。この手紙も不要。

栄の和菓子ささら屋さんのダイレクトメール。必要。お歳暮を注文するかも知れない。あら、エアメール。開封して、私は真剣になった。大学一・二年の同級生。四宮くんの手紙。

「浅倉悠哉先生御机下。文部省からイギリスに派遣されて、学習障害児教育の研究をしております。来年、帰国して愛知教育大学の助教授として赴任します。一度、名古屋にうかがい、下宿などを探したいです。（恥ずかしながら、周りに安い店の多い学生街のようなところがないでしょうか？）・・・」

この手紙には返事をすっかり書かなきゃ。私はエアメールを仕事のカバンに入れた。そして、眠気が強くなり、寝てしまったようだ。6時から7時ごろニュースの声で一度目覚めたが、お手洗いに立って、少し寝直した。

ケータイの目覚まし機能で改めて起きると、入浴して出かけた。

## イケズに負けず

土曜日、大垣から名古屋行きの電車に乗る。部活の大会に行く中高生や、結婚式に行く着飾った人が多い。私は立ったまま、塚本邦雄の文庫本「定家百首・雪月花」を読んでいた。

名古屋で中央線に乗り換え、千種まで行く。

土曜日と日曜日は高1と高2の子のめんどろをみる。速水とは初顔合わせだが、淡々とやるだけ。

私は「漢文基礎」の教室に入った。

「こんにちは。今日から聖イグナチウスの速水秀助くんがクラスに入ります。速水くん、このクラスでは田中雄二の「漢文早覚え速答法」をテキストに文法を十回ぐらいでマスターします。だいたい講義の前半で文法を説明し、後半はプリントをやりながら、漢文の知識を学びます。今日は比較です」

私はけっこう唯我独尊的なところがあり、サッサと講義を始めた。速水は意外と集中して、真剣に勉強していた。もっとも、それは想定していた。本当に勉強が苦手だったら、聖イグナチウスに入れなかっただろう。

もっともプリントをやっていると、速水はけっこう「らしさ」を出してきた。

「ねえ、『三國志』や『西遊記』は、やんないの？」

「四大小説は高校まではあんまりやらないの」

「四大小説？あと二つは何なの？」

「『水滸伝』と『金瓶梅』。『金瓶梅』はエロなの」

私は生徒にエロ倉とあだ名されていた。

速水は耳まで真っ赤にして「中国人は心が汚いつすね。昼ドラか韓流ドラマみたいっすよお」と抗議の声を上げた。「エロ倉の古文、もつとすごいよー！」と野次がとぶ。女の子だった。速水はテキストで赤い顔を隠した。

漢文の後、ボワドヴァンサンヌにいと、速水が入ってきた。

「どうだった？」

「学校よりずっといいけどさ、先生、マズイよ。一応、聖職者でしょ」

「聖職者あ？そんな言葉、十年ぶりぐらいに聞いた」

速水はプリプリしながら、ケーキを口に運んだ。

古文も一、二年生は文法とプリント。古文の方が学ぶべきことが多いので、上手く時間割を組んで休講にならないようにする。

その日は係り結びの発展用法を教え、和歌を講義した。

控え室で片付けていると、速水が来た。

「ねえ、さっきの女の子って遠山食品産業の令嬢じゃない？」

「知り合い？」

「ミッドランドスクウェアのパーティーで会ったような気がする」

意外と狭い世界の中に私の生徒たちはいる。

「口説かないでよ」

「俺はエロじゃねえよ。硬派だもん」

私は控え室の窓から速水がバイクで帰っていくのを見送っていた。

翌日、日曜日は現代文の評論の講座。小説の講座。前者では清岡卓行と高浜虚子をやった。後者は太宰治の「斜陽」

その日の速水はどこかのサッカーのチームのユニフォーム（多分、ヨーロッパのチーム）を着ていた。

「サッカーしてきたの？」

「いや、この服はミーハーだけど、俺は武術やっているから。キックボクシング。練習して、ニンニクラーメン食べて、ここ来た」



私は微笑した。

速水は学力的にはついて来られる。あとは速水が周りに溶け込めて、受け入れられて、楽しく過ごせるといいと思った。

その日は控え室で遠山ゆかりに話しかけられた。

「速水くんってチャラ男かと思ったけど、意外と真面目だね」

「意外じゃないですよ」

「今度、とびきりエロい話して挑発してよ」

「あなたがやればいいじゃないですか」

「やだー、人格疑われちゃう」

そこに速水がやってきた。

「あつ、遠山さん。あの・・・母が遠山さんのお母様によろしくお伝え下さいと申しておりました」

「速水くんって、小さい時、うちに来なかった？」

「そうかも知れない」

「何かすごいバクバクとケーキ食べてた」

「じゃあ、そうでしょう」私が言った。

「・・・送ってあげよっか」

ゆかりの顔が喜びに輝くが、私は言った。

「ゆかりは彼氏の智樹と帰るでしょう」

速水とゆかりはぎこちなく部屋を出ていった。

「イケズやなあ・・・」

白衣のヒロくんが部屋に入ってきて、窓の外を眺めた。

「おっ！イケズに負けずや！」

私も外を見る。

オードリー・ヘップバーンのようにゆかりは速水のバイクの後ろに乗っていた。私は言い様のない気持ちにかられていた。胸がザワザワする。

## さみしい休日

私はヒロくに軽く誘われたが、断って帰ることにした。うかうかと誘いにのると、金山で降りてデニーズかどこかで電車がなくなるまで食事かお茶をして、タクシーでヒロくんの部屋に行くことになるだろう。（しかも食事代やタクシー代は私が出すことになるのだ。）

年度の後半は忙しくて、とても外泊など出来ない。

金山までの電車は夜はすいている。一応、田舎から都市に向かうことになるからだ。鶴舞公園の辺り、ボウツとしていた。ネオンが多い都会になってきて、私はハツとして電車を降りた。金山だ。

東海道線に乗りかえる。大きい駅の周辺以外はけっこう田舎である。土、日の夜はそんなに混んでいない。だいたい座れる。私は闇を眺めていた。何という不満も問題もないが、何か中途半端な感じだ。

私は古ぼけたマンションの階段を静かに上がった。音をあまり立てないように鉄のドアを開ける。私は寝間以外はほとんど使っていない。うがい、手洗い、洗顔をしてから、NHKラジオをつける。今月のおすすめ映画を紹介する番組をやっていて、私は日記に紹介された作品をメモした。紅茶をストレートでいれて、クッキーを少し食べた。

眠気がやってきたので、歯を磨き、灯りを消した。本当に眠気がやって来て、私はラジオを消した。

翌日は正直なところ、昼ぐらいまで寝ていた。寝だめ食べだめは出来ないと一般に言うのは嘘じゃないかと思っている。私は血圧も低く、起きると不機嫌になっている。

ムスツとしながら、私は一つ下のフロアに降りた。ドアは開いていた。母が食事の支度をしている。私は黙って食卓についた。

出前のお寿司があり、牛肉と野菜がある。

「悠哉、すき焼きとしゃぶしゃぶ、どっちがいい？」

「すき焼き。玉子あるの？」

「あるわよ」

母はわりしたを作り始めた。私はお寿司にはしをのばした。一応「いただきます」と言つて。お寿司を食べ、玉子をからめて牛肉を食べ、私も陽気になってきて、速水というハンサムな不良のこと、学会の手紙のこと、四宮くんのことなどを話した。母もすき焼きを食べ、「ビール飲んでいい？」と言い出した。私は母が食事の時、アルコールを飲むのは好きじゃなかったが、うなずいた。

私と母。気難しい二人が生き残つて、奇妙に共生している。政治家をやつていた祖父。祖母。入り婿だった父が亡くなり、妹は嫁ぎ、浅倉家はさびしいものだ。

「来週、藤山直美のお芝居観に行くから、ついてきて、水曜日」

私は頭の中で計算した。御園座のお芝居は15時か16時くらいに終わる。それから夕方のクラスに間に合うからいいか。藤山直美は私も観たいし。

母は握り寿司を私にくれた。少食である。私はすき焼きもたくさん食べた。

私もマザコン。速水もマザコン。

私は自分のフロアに戻った。アルコールなしでも、ちょっと昼寝出来る。

夕方、起きて、映画を観に行こうかと思ったが、少し疲れがあり、部屋にいた。ラジオドラマで藤沢周平の作品をやっている。私はこういう国民的作家は好きじゃない。私が好きなのはどこかアウトロ－的な人間か、現代のことを忘れさせてくれる古典だった。私はラジオドラマは聞かず、CDでドビュッシーやラヴェルの曲を聴き、本を濫読した。一冊を集中して読むのではなく、いろいろな本をつまみ食いするのだ。そういう時に野放図にいろんなアイデアが浮かぶ。そうすると気分がよくなり、私は珍しくカクテルを飲んだ。少し浮かれて、私は寝た。

火曜日はだいぶ疲れもとれた。  
母と共用しているヴィッツで郊外のショッピングモールの中のシネコンや温泉に行く。映画を観て、合間にちよつと買い食いをする。クレープと珈琲を買って、フードコートで食べる。それから温泉に

入る。薬湯に20分ぐらい半身浴する。私はサウナはダメなのである。お風呂を上がってハチミツソフトクリームを食べる。

休みの日は過ごしにくいなあ。私は何か世の中に居心地の悪さを感じる。ベビーカーを押す若い夫婦。周りの結婚ブームも過ぎ去った。同級生が結婚したり、子供が出来たりするとお祝いを贈ったりするが、自分自身は何か取り残されている感じがする。いや、それ以前にサラリーマンの子とはなかなか話が合わない。私の周りにいるのは、子供とじっちゃんばっちゃんばかりだ。

ふっと思う。

速水は本能的に私の気持ちを分かってくれるかも知れない。周りからは、恵まれている、不満はないはず、と言われるが、何処かさみしい。速水もそんなさみしさを抱えて試行錯誤しているのかも知れない。

とりあえず、もう一本、映画を観た。明日は職場に行く。その方が気が紛れる。

## 意地悪ユーヤ

水曜日、私が控室に入るやいなや、世界史の牛島先生がやって来た。その日の夜の推薦入試の面接の説明会についての話かと思ったたら速水のことだった。

「浅倉先生、あの金髪の子、連れてきたの？」

牛島先生は四十前後で、どこかの私大の先生で、バイトで予備校の仕事をしている。

細身で、長身で、神経質な人である。

私が牛の性格をワル系、グズ系、ヨタロー系の三つに分けられると発言したことを誤解して、根に持っていた。（牛の性格については山藤章二氏の本に書いてあった。）

「今のところ、自習室で大人しくしてるけど、けっこう話題になってるよ」

私は苦笑した。

「悪い噂になってます？」

「いや、そうじゃないけど。痛々しい子だね。がり勉のボンボンのくせに、あんな風にあがいたりして」

私の心にさざ波が立った。

牛島先生は私の部屋の珈琲を勝手に来客用のカップに注ぎ、クッキ―の缶も勝手に開けた。牛島先生は私にワル系と言われたと思って

いるようだが、実際はヨタロー系である。

もつとも、その日は牛島先生は私と戦争をするつもりではなく、仕事の打ち合わせをして帰っていった。

その夜、私は特進クラスじゃないクラスの英語を教えてから、推薦の子たちを集め、面接の説明をした。生徒たちは真剣に耳を傾けたり、メモをとったりしている。よくある質問、注意すべき質問などを説明する。

終わりがけ、大人の知恵を少し話した。

「就職活動なんかだと、待合室にスパイがいるって言うでしょ。それは極端だとしても、面接が終わってすぐ感想を口走ったりしない方がいいですよ。せめて大学の最寄り駅から大きいターミナル駅に戻るぐらいまでは出来不出来を話さない方がいい。大学の関係者が何聞いてるか分からないから」

それを言っただけで私は席を立つと、一礼した。生徒たちはワツとなる。

「美佐ちゃん、すぐ感想言いそう」 「勘太、口にチャックしろよ！」

私は牛島先生とテーブルの上を片付けた。幸い私たち二人とも「頑張るぞ！オーオー！」などと叫ぶのは大嫌いなので、アッサリしたもの。（そういう意味では私たちは似た者同士。）

控室に帰る時、自習室をのぞいた。速水が勉強している。



木曜日と金曜日は受験生に大学の過去問を講義する日で、目が回るようだった。

土曜日。古文基礎で「大和物語」を講義する。仁明帝が崩御した後、五条皇太后に暗殺されることを恐れた僧正遍昭は失踪する。しかし、小野小町は清水寺で偶然、遍昭に再会する。そして、昔の人のエチケツトとして歌を詠む。

「岩の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣を我に貸さなむ。岩の上に旅寝をするとても寒い。お坊様の苔の衣を・・・最後の一節、ゆかり、訳して。我に貸さなむ」

「私にかして欲しい」

「はい、よく出来ました。速水、返歌を訳して」

「世を背く苔の衣はただひとへかさねばつらしいぞ二人寝む。世を背く僧の苔の衣は一枚きりだ。かさないとつらい・・・」  
速水はそこで言い淀んだ。

「一緒に二人で寝よう・・・」

「一緒に二人で寝るって、何するの？わかんない！」

クラス中が大爆笑した。速水は耳まで真っ赤にしている。

「SEXしようってことでしょ！」

ゆかりが言って、速水は教科書で顔を隠した。

「エロ倉のアホ！だいたい僧正って坊主だろ！心が濁ってるぜ！」  
私はプリントを配った。

「でも、本居宣長はこの辺りを論評しながら、僧でも恋やSEXをしてもかまわない。それが日本の心だって説いたんですね。来週までに読んできて」

「エロ倉の師匠だぜ！」

速水のおかげでクラスが活性化されている。

その日も速水とゆかりはバイクで帰っていった。智樹のことはちょっと心配だったが、私は比較的満たされた気持ちで帰途についた。

翌日、速水にカウンターをくらった。速水は私を含めた教室のメンバーにプリントを配った。「意地悪ユーヤの真つ赤な真実」というタイトルで、私のくせがまとめてあった。速水はプリントに沿って私の真似を始めた。

「ボウドヴァンサンとか控室にいる時、苛立っている時」

速水は珈琲を飲む仕草をしながら、ボールペンで机を一定のリズムで叩いた。私は苦笑した。よく観察している。出来の悪い論文や、生徒の成績が下がった資料を見ている時の苛々している私を表している。

「こうやってプリントを見てる」

速水はメガネを外す仕草をして、プリントを顔に近づけた。私は真

っ赤になつて抗議した。

「それは印刷の質が悪いし、誤字・脱字が多いからですよ！」

「しゃべり方が丁寧だから目眩ましされているけど、けっこう言うことがキツイ」

皆が手を打って大爆笑する。速水はピースをして、「近々、第二弾を出します!!」と言った。

腹立たしいと言えば、腹立たしいが、面白かった。

その日は鷺田清一と内田樹の評論、川端康成の「掌の小説」を講義した。

クラスに反逆ムードが広がり、ゆかりが「エロ倉って朗読が好きなのよ。大学時代、演劇のサークルをやれなかったルサンチマンを原動力にしてるの」と言った。

私の時間の後に、速水とゆかりたちは休憩室でお弁当を食べていた。

「近藤先生ってさ、小栗旬に似てるよね」

「はあ？若槻千夏か、チュートリアルの徳井じゃない方に似てるよ」  
「たまたま通りすぎたヒロくんが」  
「こらこら、てんご（悪ふざけ）」  
言うたら、あかんで」と、速水に抗議していた。

## 夢だもの

その日の私は大垣に帰らなかった。翌日に用事があったので、サーウインストンホテルに泊まった。ビジネスホテルぐらいの料金で泊まれる部屋がある。ビジネスホテルよりは広くて、きれいな部屋だ。私は部屋に入ると必ず、洗顔、手洗い、うがいをする。疲れているので、スポーツドリンクを飲み、ベッドに横になる。自宅では見ないTVを少し見る。少し疲れがとれて、シュークリームやエクレアを食べて牛乳を飲む。入浴して寝た。

翌朝はちよつとだけ怠たくして、ホテルで朝食をとる。アンティーク家具や陶磁器、ガラス細工で飾られた食堂に行く。まず、珈琲を頼み、パンを幾つかオーダーする。

パン、バター、ジャム。ハムやベーコン、ウインナー、スクランブルエッグ、サラダ、焼き野菜などが運ばれてくる。最後、果物と珈琲で食事を締める。

チェックアウトは12時なので、部屋でゆっくりする。そして、昼近くチェックアウトすると、近くのビルの展望カフェに入った。

松浦先生、小山田先生、牛島先生がすでにいる。  
今日は歌の会。

「何か食べます？」  
「いえ、いいです」

私たち四人は時々、自作の和歌や俳句を発表しあっていた。

「裏通りノスタルジック秋句ふ」

小山田先生の発句に私が下の句をつける。

「天国の雲の上のKさん」

「ああ加藤和彦のことですね」

私たちはひとしきり、あんな大スターが自殺するなんて信じられない、とか、今年は井上ひさし、三浦哲郎、河野裕子、森澄雄、つかこうへいとか大物の物故が多い、とか話した。句のよしあしと言うより、句を手がかりにいろいろ話すことが会の目的だった。

私

「銀杏にも男と女があるんだよ、そんな言葉を思い出す秋」

「ユーヤの作品はライトヴァースですね」

小山田先生の言葉に一瞬、ヒヤツとする。牛島先生は何事かを松浦先生にムキになって話していて気づかないようだった。

私もすぐ、「アララギ」をどう思つかといった文学談義の方に夢中になってしまった。

夕方近く、松浦先生は牛島先生に「車で送って下さいよ」と言っ  
て、二人は帰っていった。

私はボールペンで静かに二回、机を叩いた。

「人の前でユーヤなんて呼ばないで下さいよ」

小山田先生は古歌で答えた。

「いくそたび君がしじまに負けつらむものな言ひそと言はぬ頼みに  
（何回あなたの沈黙に負けてしまっただろうか。何も言わないでと  
言わないことだけをあてにして、つい、また話しかけてしまった。）

」

「その歌って源氏の中で一番ブスなヒロイン、常陸の女王（末摘花  
のこと）に贈られた歌ってご存知ですね？」

小山田先生は首をかしげた。

「夜は何を食べましょうか？」

「和食がいいです」

このオヤジ、絶対、確信犯。そう思いつつ、私は小山田先生につ  
いて行った。一緒にカニ料理のお店に行った。

その日は夜遅く、大垣に帰った。帰りの指定席の特急の中でウトウ  
トしながら、小山田先生が奥さん、子供にお寿司をお土産に買って  
いたことを思い起こしていた。

疲れていて、眠りが深かったのか、その翌朝は比較的早く起きた。  
珈琲を飲む。

卵を二つ使い、オムレツを作り、駅ビルのパン屋さんで買ったピザ  
をレンジであたためる。親戚にもらった柿をカットする。

その日は本を読んだり、手紙に目を通したりして、過ごした。四宮くんにも手紙を書く。

「四宮徹先生御机下。お手紙ありがとうございました。御高著『イギリスの障害児教育』も拝読いたしました。名古屋にはもちろん、学生街がございます。一緒に探しに参りましょう。ところで、もしよかったら、私の勤め先でお仕事なさいませんか。イギリスに滞在されていたのなら、英語は問題ないでしょう。国語、数学、社会なんかもお得意ではありませんか。よろしかったら、教えて下さい」

私は悩み相談というのは昔からあまり好きでなく、ラジオで悩み相談が始まったので、ラジオを消した。中島みゆきの新しいCDを聴く。「夢だもの」という曲があった。私の人生も夢だもの。

## DAYS

翌日は母と午前中に出かけ、御園座でお芝居を観賞。幕間に食事をする。

夕方には地下鉄で千種・今池方面に向かう。私立高のおとなしい子たちに英語と古典を講義する。ほとんどは教科書の解説である。もっとも彼らは学校でいい成績をつけてもらって、推薦で進学することが多い。だから、彼らなりに真剣である。

講義の後、速水が控え室に来た。

「あれっ、今日も来てたの？」

「うん、自習室に。ところでさ、今のクラスに前園慎一郎くんって来てるでしょ」

「知り合い？」

「いや、何か気になって」

「BLってやつ？」

「発言に責任持てよ！オッサン！あの子って美大行こうとしてるの？」

「そうだよ」

「美大って難しいの？」



「ペーパーテストは難しくない。実技が一番たいへん。あと、小論文があるけど、医学部と違って独創性やアイデアが大事なの」

「前園くんは合格判定は？」

「Aかな？」

「ちょっと観てみたいな前園くんの絵」

「いいよ、頼んであげる。木、金はたてこんでいるから、土曜日にね」

「頼むね」

速水は帰っていった。

木、金と受験生相手の仕事をする。

私は教卓に寄りかかって、話をした。

「大鏡は道長以外の藤原一族は批判しているって教科書に書いてあるでしょ。道長は礼賛しているって。でも、実際、通して読んでみると道長のことも批判しているんですよ。けっこつ」

生徒たちがドツと笑う。

「例えば道長は紀貫之や白楽天より詩歌が上手いとか・・・ほめ殺しなんですよ」

文系で一番優秀な小島がふざけて言った。

「速水くんも浅倉先生にほめ殺されちゃいますね」

「あんなもん、道長と比べたら大物じゃないから駄目です」  
皆がドワツと笑う。

木、金は控え室でコンビニのパンなどを慌ただしく食べることもある。もっとひどいと、珈琲と菓子など。非人間的生活だが、仕事はお声がかかるうちが華らしい。

土曜日、前園慎一郎に声をかけた。

「前園、速水って知ってる？」

「知ってます。今、人気の子ですよ」

「あいつ、前園の絵、見たいんだって。見せてやってよ」

「えー、僕の絵なんかたいしたことないですけど」

「漢文基礎の後、ちよつと控え室に来て」

漢文基礎で「反語」をやる。問題文は「十八史略」

「あつ、これ『三國志』の話じゃん」

「『十八史略』っていうのに載ってるバージョンのね」

「でも、だいたい分かるよ。呂布の死のところだね」

「名作を読んでおくと、つぶしがきくのです」

その講義の後、控え室で速水と前園を対面させた。

「聖イグナチウスの速水です」

「光が丘学院の前園です」

「スケッチブックの中身、見たいんだって」

前園ははにかみながら、中身を見せてくれた。

「すげえっ！これ前園くんが描いたの？」

「そうだけど、全然すごくないです・・・浅倉先生にいろいろ教えてもらって・・・」

「えっ！エロ倉って絵も描けるの？」

「いや、実技はダメだけど、美術史の勉強したから」

「けっこう操られています。お正月に細見美術館のコレクション、観に行かされたり、トリエンナーレ行ったり」

「美大合格したら、来年のゴッホ展、行く約束してるんだよね」

「俺、マンガは描けるけど、こういう芸術的な絵は」

和気あいあいとしていた。  
ところが。

「先生」

須賀さんが困った顔で入ってきた。速水と前園にチラと目をやったが、重大な要件だったので、ためらわず告げてきた。

「野村くんが家出したらしくて」

私は片手で顔を覆った。

野村英治は二浪している子だった。岐阜市に住んでいて、中堅の公立高校に通っていた。家が歯科医で、歯学部を受験したのだが、少し体の弱いところがあり、受験に失敗してしまった。

気も弱いところがあり、一浪目はショックを引きずって、よく家出をして、また駄目だった。

私はカウンセリングの勉強もしていたので、小論文指導という名目で月一回ぐらい面談していた。

頭の中で一瞬のうちにいくつかの可能性を考える。多分、先週の全国テストが失敗したんだ。推薦入試に気をとられてて、気配りが足りなかった。それに年末年始の雰囲気になってきたのも、よくなかったのかも。精神的に悩みのある子にとって夏休みや年末年始の楽しい雰囲気も、心の重荷になることがある。

私は意外と果敢なところがあり、英治に電話した。出ない。留守電を入れる。

「英治、どこにいるの？みんな、心配してるから、連絡して。講義始まるから、留守電かメール入れといて」

同じような内容をメールでも伝える。

あー、ちくしょう。次の講義が終わるまでに連絡して来なかったら、どうしよう？

「大丈夫？」

速水が心配して尋ねてくる。前園は意外と悠々としていた。

「大丈夫だよ。先生が迎えに行くとたいてい素直に従うから」

私は笑えなかった。しかし、虚勢を張って、「さ、古文やろ」と言った。

「野村、また家出したんだって」と生徒たちが話していた。私は動揺を隠して講義をやる。賢い子が多いので、みんな、協力的にしてくれる。

「井原西鶴は人間の欲望や愚かさ、醜さを徹底的に見つめました。『人ほど賢く、まただましやすいものは御座なく候』『人は欲に手足のつきたるものぞかし』西鶴はそう豪語して、伝統的文学の美を否定し、金や性欲を追い求める人間の悪の姿を描いたのです。ピカレスクです」

速水の怒りが爆発する。

「心の汚いジジイっすねえ。俺はこういう奴、大嫌いです」

「そうかなあ。こういふのこそ、真実の文学だと思うけど」

優等生の村上潤が言った。

「『家にありたきは桜梅松楓、それより金銀銭米ぞかし』『洛中洛

外図屏風は銀山を掘り出す絵に描きかえさせる』『はかない朝顔は豆に植えかえさせる』そんな挑発的な表現がたくさん出てきます。しかし、西鶴は闘うべき伝統文学を十分理解していたことも見逃してはいけません」

「俺はこういう奴は大嫌いだぜ!!」

私は苦笑した。速水の一本気な性格は西鶴に力チンときたのだろう。

その日は少し早めに講義を切り上げる。控え室に戻り、ケータイの電源を入れた。

ホッとした。

野村からのメールがあった。

「アスナル金山にいます」とのことだった。私はコートを羽織ると予備校を飛び出した。

中央線で金山駅まで行く。どちらが表か裏か分からないが、グランコートホテルやスターバックスのある方の反対側に、アスナル金山というスペースがある。中央にステージがあり、日中はいろんな行事をやっている。それを囲むように飲食店やショップがある。野村は野外ステージの席に座っていた。

「英治、何やってるの!? ずっと外にいたの?」

野村はうなずいた。

「どっかに入ろうよ。寒いよ」

野村はまたうなずいた。

私はデニーズが好きで、入った。

「私、急いできたから、何か食べていい？英治も食べたら？」

「俺は珈琲でいい」

私は和風ビーフシチュのセットを頼んだ。

「何で家出したの？模試のこと？」

野村は涙ぐんでうなずいた。

「何か上手く行かなくて・・・」

「そんな一喜一憂してたら・・・最近、成績も安定してるし・・・」

野村が何か言い淀んだ。

私は黙っていた。料理が運ばれてくる。温泉玉子をご飯にかけて食べ、カキフライを食べた。シチュの野菜にはしをのばすと、野村が涙声で言った。

「成人式の・・・案内が来て・・・それがイヤだった・・・」

野村がすすり泣いた。落ちつくのを待って、私は言った。

「何か食べたら？」

「・・・鍋焼うどんのセット食べる・・・」

私は和風ビーフシチュを食べていた。

成人式の案内がイヤだったと言う英治を私も笑えない。私も時々、世の中に上手く溶け込めない自分に苛立つ。

ガツガツと食事する英治から、ちよつと視線を外すと、若者のグループが食事したり、酒を飲んだりしている。

前に英治が家出したのも名古屋港大花火大会の夜だった。

英治のさみしい背中を忘れられない。

今はそのさみしさに寄り添ってあげるしか出来ない。

新しいチーズケーキを二人とも頼む。

英治は落ち着いたようだった。

「先生、ごめんなさい」

「いいよ、今日は新しいチーズケーキが食べられた風流な日」

二人で指定席の特急に乗り、帰ることにした。

岐阜に近づいた時、私は尋ねた。

「大丈夫？家まで送ろうか？」

「いいよ。そしたら先生、終電なくなるでしょ。ちゃんと帰れます」

野村は岐阜に最近建てられた43階のタワーの中のマンションに住んでいる。

野村を見送ってから、私は座席にもたれた。

野村は最後に私を気づかせてくれた。

持ち直すかも知れない。



持ち直して欲しい。

帰宅するとラジオを聴き、若冲の画集を眺めた。  
牛乳を飲む。

やがてリラックスするとドツと疲れが出て、眠った。

## 秘密

翌日、私は速水やゆかりたちに現代文を講義した。速水が話しかけてくる。

「この前、『大和物語』やったじゃん。六歌仙でバンド作ろうって話してたの。在原業平と小野小町がヴォーカル、僧正遍昭がギター。喜撰は・・・キーボードでいいか。大友黒主がドラム。ベースは文屋康秀」

「それで皆がそれぞれの役やるの？」

「速水くんは業平」

「やだね、チャラ男は」

「僕、ギターやるから速水くんは業平」

村上潤が言った。

「僕、ピアノやってるから、キーボードやる」

野上佳彦が言った。

「智樹、ドラムやってよ」

「いいよ」

ゆかりが彼氏の智樹に言った。

「じゃあ、僕、ベースやります」

前園慎一郎が言った。

「ふうん、じゃあ、ゆかりが小町か」

私が言うつと

「いいえ、小町って百日間、男をパシリにしていた悪女でしょ。ゆか

りは役者不足だから、エロ倉先生にお譲りします」

皆がドワツと笑う。私も苦笑した。

目崎徳衛の「百人一首の作者たち」と司馬遼太郎の「項羽と劉邦」を講義する。

月曜日、私は母と名古屋に出かけた。松坂屋美術館でアール・ヌーヴォオの美術展を観賞する。

それから歩いて東急ホテルに行った。ボジョレ・ヌーヴォオを飲む会に参加するのだ。場所は一階のラウンジ、グリンデルワールド。

喫煙席の方にランドピアノが置いてあり、生演奏が行われている。私と母は禁煙席に座った。ボジョレ・ヌーヴォオやいろいろなワインとチーズはウェイター、ウェイトレスにオーダーする。会場の中央にある軽食は自分でとる仕組みになっている。母はチーズが好きなので、席に座ってオーダーしている。私はサンドイッチと果物を取りに行った。おつきあいでもボジョレ・ヌーヴォオを二杯飲んでから、私はシャンパンを飲むのに切り替えた。

「あの・・・浅倉先生じゃないですか？」

「あ・・・えつと」

「和泉です。北区の。娘がお世話になりました」

酔いだしていたこともあり、とつさに思い出せなかったが、二年ぐらい前にめんどろをみた子の母親だと気づいた。

私はシャンパンのグラスを持ったまま、少し立ち話をした。私の母

は何も気にせず、ワインやチーズをオーダーしており、私はお嬢様育ちの母に苛立った。

和泉さんが席を去っていく。

「ママ、挨拶ぐらいしてよ！」

「でも全然知らない人だもん」

私は腹を立てて、マスカットを口にした。甘い果汁があふれる。

母親をタクシーに乗せ、指定席特急のチケットを渡すと私はプリシードホテルに宿泊した。翌日が祝日（勤労感謝の日）で、特別講義があつたからだ。

私は翌朝、繁華街を歩いた。東京もそうだったが、繁華街は朝がわびしい。道も汚れている。いろんな店が開く十時になるまでがわびしいのだ。

地下鉄で千種の予備校まで行き、私は十時から医学部や難関大学の受験のための小論文の教室をスタートさせた。朱を入れて添削した原稿を生徒に返却する。ゆかりと速水は受験生ではないが、参加していた。私は一つ一つの論文を論評し、医学部受験でよく出るテーマの解説をした。ちなみにだが、今は医学部でも医療に関することではなく、感性を問うものが多い。

「次の俳句を読んで答えなさい。『その方がいいと思うと蝸牛』その方とは何でしょうか？色々、考えられますね。私はこう思いまし

た。蝸牛はゆっくりスローモーションで生きています。だから自然食品を選んだり、スローライフがいいということですよ」

「そうかなあ。そんな能天気なもんかなあ？」

速水が異を唱えた。

「蝸牛はカラの中に閉じこもっているでしょ。ニートとか引きこもりの子の哀しみを訴えてるんじゃないかな？」

それをきっかけにスローライフ派とニートの哀しみ派で大激論になった。もちろん、どちらかが正しいという訳でなく、表現力や説得力を競うもので、理想的な展開だった。

「古代中国人はね、蝸牛角上の戦いつて言っただけ、蝸牛の角の上にもパラレルワールドがあると考えたの。道教の神秘思想なんです」

私も余計な雑談までしてしまった。

昼まで講座をやってから、私は速水と前園を連れて、千種の街に出た。262円のお弁当を買って公園のベンチに座った。私のおかずはチキンカツ。速水は肉じゃが。前園はカキフライ。速水が前園にたずねる。

「前園先輩って、家、法律事務所でしょ。継がなきゃいけないって言われなかったんですか？」

「言われませんでした。兄と姉がすでに司法試験に合格しているし、僕は闘争心が少ないから、弁護士に向いていないんです」

「いいなあ。俺は将来、医者にならなきゃいけないんです。レールの上を歩かされて」

「でも、速水くんは頭もいいし、優しいから、医者に向いていると思うけど」

「とりあえず医師免許をとって、それから方向性を決めりゃいいんですよ」

「本当、いいかげんだな、エロ倉は・・・」

私も家の仕事を継いでないからな、と思っていると、佳彦が走ってきた。

「先生、たいへんです！財布がなくなっただ！」

私は眉をひそめた。

「ちゃんと探したんですか？」

「カバンの中にはないです。自習室の場所とりに置いておいたらなくなっただの」

私は困ったことが起きたな、と思った。私の勤めている予備校は外部からの侵入は出来ないようセキュリティのシステムがある。その分、内部で盗難が起こることは想定していなかった。自習室の場所とりは財布でやっている子が多かった。

とにかく急いでビルに戻る。ヒロくんとゆかりが困っていた。

「近藤先生、どうなってるの？生徒に知らせた？」

「いや、今日の責任者の浅倉先生がいてはらへんかったんで呼びに行かせて、今、潤と智樹が佳彦の財布を探しています」

私は唇をかんだ。目をつぶって、少し考える。自習室の廊下に自販機が並んでいる。そのゴミ箱！私は見当をつけると、そこに向かった。ゴミ箱のふたを開ける。

「あっ！あつた！！」

佳彦が叫んで、財布を拾った。

「よかった、カードある」

佳彦の財布には色々なポイントカードがあった。私は動揺を抑えて言った。

「現金は？」

佳彦は財布を調べた。

「ないです」

私の胸は早く鳴った。

「いくらぐらいあったの？」

「二千円ぐらいだから、大丈夫です」

「いや、大丈夫じゃないの。でも、とりあえず、あまり大きく言わないで。先生が解決するから」

佳彦は訳も分かっていないまま、うなずいていた。

私は自習室に入ると二回手を叩いた。

「皆、勉強中悪いけど、ちょっと聞いて下さい。ある生徒が場所とりに置いていた財布が紛失するという事件が起きました。財布、キータイなど貴重品による場所とりはしばらく控えて下さい」

生徒たちがざわめく。

「今日は事務所がお休みなので、明日以降、詳しいことは連絡します」

そう言い残して私は控え室に戻った。須賀さんへの伝言メモを作る。胸はざわめいていた。

翌日、主な講師が集められ、今回のことでミーティングをすることになった。私、松浦先生、牛島先生、ヒロくんが参加。私とヒロくんが経緯を説明した。須賀さんは汗を拭いていた。

「困った。困った。うちは少数精鋭でトラブルのないのが売りですからね。こんなご時世だから自習室の見張りをやる手のすいた人もいないし」

私がいた日に起こったことで、私は仕方なく、発言した。

「とにかく注意喚起を生徒に促して・・・それしかないでしょう」

自分の言っていることが馬鹿馬鹿しくて、ムカムカした。その時に牛島先生が無神経なことを言った。

「あのグレた子が危ないんじゃないの？」

私は怒りを抑えながら、反論した。

「速水は昨日、ずっと私と一緒にいました」

「でも、トイレとか席外したこともあるでしょう」

「それは・・・」

松浦先生が上手く間に入った。

「まあ、生徒を疑っちゃいけませんよ。しばらく様子を見ましょう」

私は松浦先生にうなずいた。



その日は英語を教える日だったが、教室にいても、自習室をのぞいても、生徒たちは財布の紛失事件のことをひそひそ話していた。そして速水を白い目で見る者は決して少なくないのだった。木曜日も金曜日もそうだった。

金曜日の帰りかけ、野村も話しかけてきた。

「先生、聖イグナチウスの子が財布を盗まれたの、あの金髪が犯人なんじゃないかな？」

私は野村を叱った。

「何か確証があるんですか！？」

「確証は俺が作る！お金に名前書いといたから」

「英治！よく覚えておきなさい！紙幣に何かを書き込むのは法にふれることです！そんなことせずに勉強にうち込んでいればいいの！」

英治は口をとがらせた。私は苛立っていた。

苛々しながら帰ると、リビングキッチンが勝手に模様替えされていた。母が勝手にやったのだ。やらないでと言っているのに。私は寝間に入ると、布団に寝そべって泣いた。

いろんなものが自分の前に立ちふさがっているような気がした。

宝物をしまっているオルゴールの宝石箱を開ける。グアムで撮った家族写真。

私と両親と妹のまりあと 弟の佑亮。この日が浅倉家の幸福の絶頂だった。帰国直後に佑亮がバイク事故で亡くなり、私の家族はバ

ラバラになったのだ。父と祖父母も失意のうちに亡くなり、母とまりあは険悪になった。

私は写真にそつとキスした。

涙はあふれてきたが、急に強い思いがフツフツと湧いてきた。

速水を守らなきゃ。佑亮は守れなかったけど。

そう思った。

泣いて、泣いて、いつか眠った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6709o/>

---

不良

2011年10月7日15時20分発行